

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第13号 2020年11月1日

目次

巻頭言／史資料解説

南山大学瀬戸キャンパスの新学部のシンボルとして作成された「Four Winds」
..... オズワルド・カバラル 2

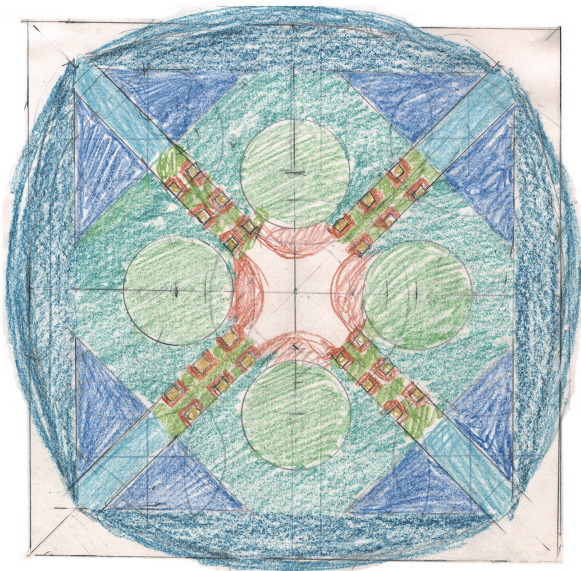
G棟地下の隠れ家 坂井 信三 4

女子部の桜 旧校舎時代から現在までの変遷 岡 一郎 6

中村哲先生 ご来校 熊川 重也 9

旧南山小学校の児童文集より 西脇 良 11

学び舎の記憶「聖霊アーカイブ」活動 鈴木 稔子 14



左：J.F. コンリス師 モザイク制作のためのスケッチ
（カトリック神言修道会日本管区センター所有、南山アーカイブズ受託）
右：J.F. コンリス師 「Four Winds」
南山大学瀬戸キャンパス講堂棟外観（2009年撮影）

巻頭言／史資料解説

南山大学瀬戸キャンパスの新学部のシンボルとして 作成された「Four Winds」

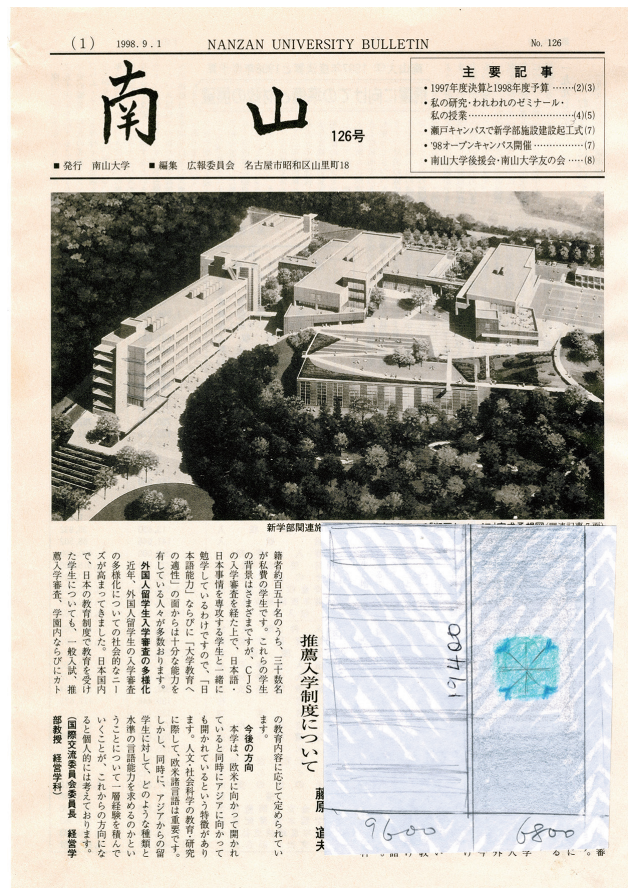
オズワルド・カバラル

2000年3月の終わり頃、授業が始まる前に自分の研究室を片付けるため、南山大学の新キャンパスに向かっていた。国道155号から横路に入ると、講義棟の正面に付けられたJohn F. Conlis神父(1928 - 2006)のモザイク「Four Winds・四風」が春の光を浴びて輝いていた。

モザイクのタイルは柔らかいパステル色、その上に渦巻きを思い出させるスチール(鋼鉄)のフレームがあって、二次元のモザイクに立体感を与え、太陽の動きにつれて日時計のように変わりゆく陰を映した。新学部、特にアジア人の多い総合政策学部に対応しいシンボルで、翼・麦・十字架をモチーフに四方に広がる風を表していた(p.1写真)。一方ではカトリック大学の精神を伝え、他方では一般の人々にもアピールするシンボルであった。それほど考えずに、二年間に渡ってその完成された美術作品をほとんど毎日仰ぎ見た。

2001年、アイルランドに帰国する直前のコンリス氏が、持っていた自分のスケッチと他の作品等を日本に残した。その資料(南山学園の歴史を考えると、史料にもなる)を整理していくと、最初のスケッチから完成モデルに至るまでの「Four Winds」制作の過程が明確になった。その美的なプロセスを見ると、芸術家自身の評価が高くなった、モザイクの多彩な意味がよりよく把握された。言うまでもなく、美術作品の依頼の場合には官僚制上のプロセスもある。例えば、モザイクを作成するのは誰のアイデアであったか、何故コンリス氏に委ねられたか、どう言う具体的な指示が与えられたかなどである。または作品の作成上では、技術的な作業もある。例えば、タイルの色と焼きかた、鋼鉄の形付け等々。今回このような側面を省略し、モザイクの意味のみに焦点を合わせる。

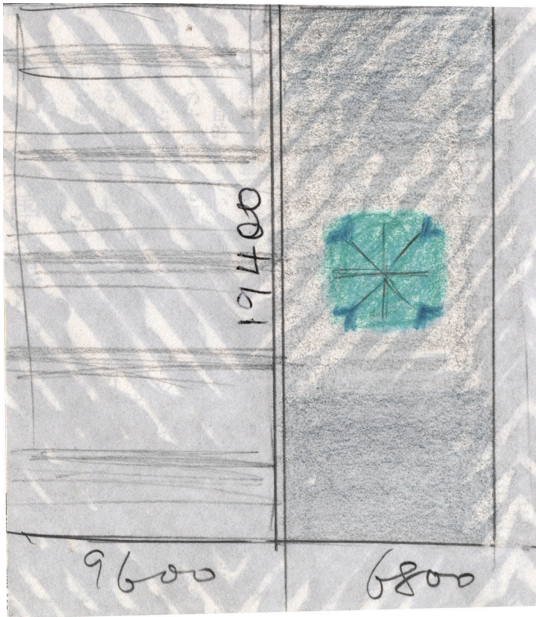
モザイクの最初の案は、機関誌『南山: Nanzan University Bulletin』126号(1998年9月1日)の表紙に掲載された瀬戸キャンパス完成予想図の下部に貼り付けられた(図①)。



図①

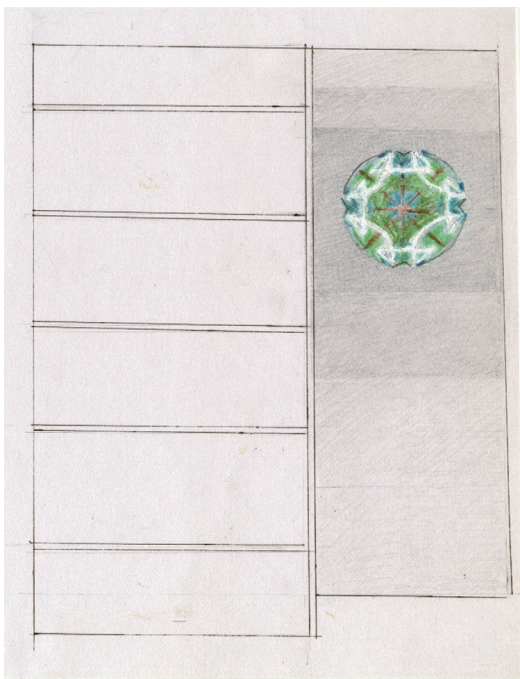
スケッチに描かれた講義棟の正面は大きく二つに分かれて構成されていた。左側に非常階段とバルコニーがあり、右側は何もない壁。正面の寸法は高19.4m、幅は9.6m(左)、6.8m(右)とある(図②)。課題は131.9㎡の長方形である。モザイクはこのほぼ真ん中に、十字架をモチーフに青いパステルで描かれた。ここで注目すべき点は二つある。①完成予想図の閲覧に基づいて案が出来

たこと、②講義棟の正面の寸法のみを獲得していたことである。コンリス氏の空間の認知は鋭く、敏感であった。



図② (図①部分拡大)

第二の段階になると、実際のモザイクとの一致が少し増す。四階と五階との間、形も微妙に変わった円形となり、色も変わって緑色が目立つようになる。また、以前に比べて模様は複雑になって、風の渦巻きが現れる。ただしこの模様がモザイクの一部であるのか、或いはスチールのフレームであるかは、はっきりしていない(図③)。

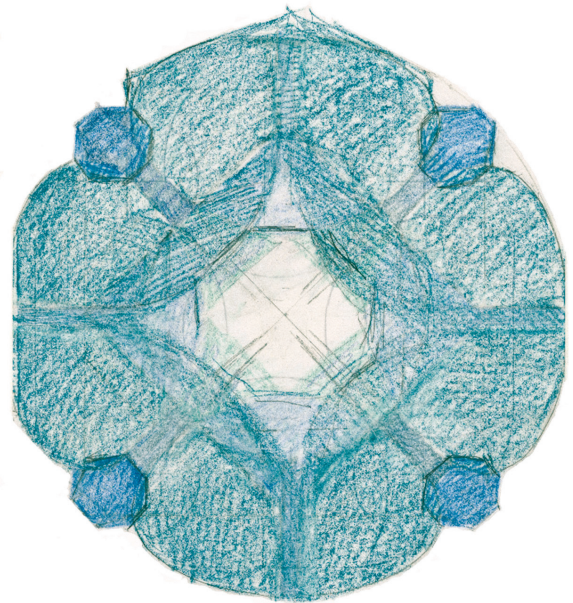


図③

モザイクの解釈と意味の面で、第三の段階は興味深い。モザイクの名称は「四風」であるが、コンリス氏のスケッチを見ると「四海」と言う別名も記されていた。「四風」にしても「四海」にしても意味はほぼ同様で、「四方」に相当する。四方に広がる風は新キャンパスの卒業生のイメージにもなるが、四方から新キャンパスに集合する大学生のイメージだと考えてもよい (p.1 図)。瀬戸キャンパスにつくられた新学部の国際的な雰囲気をよく捉えている。

第四の段階のスケッチをみると、モザイクの解釈と意味とは最も複雑になる。「四風」と「四海」に「四福音書」と「四つ葉のクローバー」の名称が付け加えられた (図④)。前者はもちろんだが、後者も良く知られたシンボルで、四つ葉を見つけた者には幸運が訪れる。幸運が訪れない凡人は、単なる三つ葉で満足しなければならない。同時にクローバーはアイルランド人の好む「Shamrock」に当たる。「Shamrock」はケルト族の僧であったドルイドにとって聖なる植物であり、その後の伝承によると、聖パトリックはそれを以ってアイルランド人に三位一体の神秘を説いた。

2020年3月の半ば頃、別の用事で瀬戸キャンパスに向かっていた。横路に入ると講義棟はなく、モザイクと共に解体されていた。モザイクの制作から完成までの資料は南山アーカイブズに保管されている。



図④

(南山アーカイブズ館長/南山大学名誉教授)

G棟地下の隠れ家

坂井 信三

南山大学では、現在「レーモンド・リノベーション・プロジェクト」が進行している。そのための募金趣意書には、「自然を基本として」という設計思想にもとづいてアントニン・レーモンドが設計した建物群（1964年完成）を中心として、「歴史あるレーモンド建築を次の世代に継承し、学生生活環境や学習環境を充実させていくため」と、その目的が示されている。この建物群について、私は数年前に論文を書いて『アルケイア』に投稿したことがある¹。その作業をとおして、私はレーモンドが考えていた「自然と調和した建物」の構想に理解を深めることができた。

とはいえレーモンドの建築は今となってはかなり古い建物なので、現代的な教育環境として利便性・安全性に問題があり、すでにかつての第一食堂・学生会館は取り壊され、その跡地にR棟が立てられている。そうした中で、F棟・H棟・G棟の一群の教室棟は、耐震工事と内装の改修によって2019年に快適な建物に生まれ変わった。これらの教室棟の中で、私にとってとくに印象の深いG棟の思い出について書いておこうと思う。

私が南山大学文学部人類学科に入学したのは、1970年のことだった。当時の人類学科の入学定員はわずか10人だったが実際の同級生は確か24人で、うち10人が全国各地から集まった男子学生だったと記憶する。本当に少人数で、喧嘩も多いが仲の良い学科だった。学科には、「文化人類学研究会」（通称文人研）という任意団体があった。文人研には考古学系の「考古サークル」と文化人類学系の「調査サークル」があり、私は後者に所属して奄美諸島でのフィールドワークに打ち込んでい

た。

文人研は任意団体だったので部室はなかった。だが、私たちにはかなり自由に使える素晴らしいスペースがあった。それが、表題に掲げた「G棟地下」だ。「地下」といっても、本当はレーモンドが居室として設計した空間ではなく、文字通り教室の地下にあたる床下部分で、たぶんもともとは建物の基礎と傾斜した地面との間にできた隙間だったのだろう。レーモンドは起伏の多い斜面を整地せずできるだけそのまま利用しようとしたので、建物の床下には、場所によって空隙ができていた。そこにコンクリートで壁と床を作り、鉄製のドアをつけた倉庫があった。それが私たちのたまり場となった「G棟地下」だ。

レーモンド建築設計事務所が作成した「教室棟 全体断面図」²の該当部分を切り取って示そう。図はG棟の階段教室とその奥（東）にあるG21からG24教室の部分（図には、4×100 SEATING 1st FLと書かれている）、およびその階下の生物学研究室（SCIENCE LAB 1st B FL）を示している。図面には記入されていないが、地下2階にあたる部分は外国語学部用のLL教室だったと記憶する。私たちの「G棟地下」はさらにその下、図面の22番と23番の柱に挟まれた床下空間のことである。

ここは当時人類学博物館（正確には人類学研究所の展示室で、まだ博物館ではなく「博物館相当施設」だと、早川正一先生はおっしゃっていた）の倉庫として使われていたところだ。そのころ展示室は図書館棟の3階にあったが、そこに収まらない大量の発掘資料がトロ箱で

¹「建築家アントニン・レーモンドの見た『自然』——山里キャンパス建設をとおしてみたランドスケープ形成の民族誌的研究——」、『アルケイア』第7号、2013年。

²「教室棟 全体断面図」、1962年4月6日作成、レーモンド建築設計事務所、清水建設名古屋東事務所提供。

この倉庫に積み上げられていたのだ。私たちは毎週水曜と土曜の午後、このG棟地下倉庫の鍵を借りてきて、そこで部活動をやっていた。倉庫の奥は発掘資料の山だったが、手前の半分ほどは空きスペースになっていて、そこに畳3畳分ぐらいの作業用の大きな机があった。廃材で作ったものだが、大きくて頑丈で、私たちにとっては理想的だった。

総合受付の職員の方はもしかすると気づいていたかもしれないが、私たちは人類学博物館の作業のためという名目で鍵を借り出し、そこで文人研のあらゆる活動をしていた。文人研の全体会議も、サークルのミーティングも、それからもちろんただのダベリングや、ときには言い争いや喧嘩も。さらにここには文人研所有の（だと思う）ガリ版があった。フィールドワークの中間報告書、毎年の新人勧誘のためのパンフレット、学祭で撒くビラなど、ありとあらゆる印刷物はこのガリ版が引き受けてくれた。

もっとも、私たちがG棟地下を使ったのは水曜と土曜だけではない。実は、倉庫には南側の壁の高いところに明り取りの窓があって、私たちは内緒で、鍵を借りなくても入れるようにその鍵をときどき開けっ放しにしておいた。だから一部の男子部員にとって、そこは大学の中で、誰も来ない誰にも見つからない隠れ家でもあった。そういう意味でも、G棟地下は私にとって思い出深い場所なのだ。50年も前の話だから、もう時効ということにしてもらってもいいだろう。

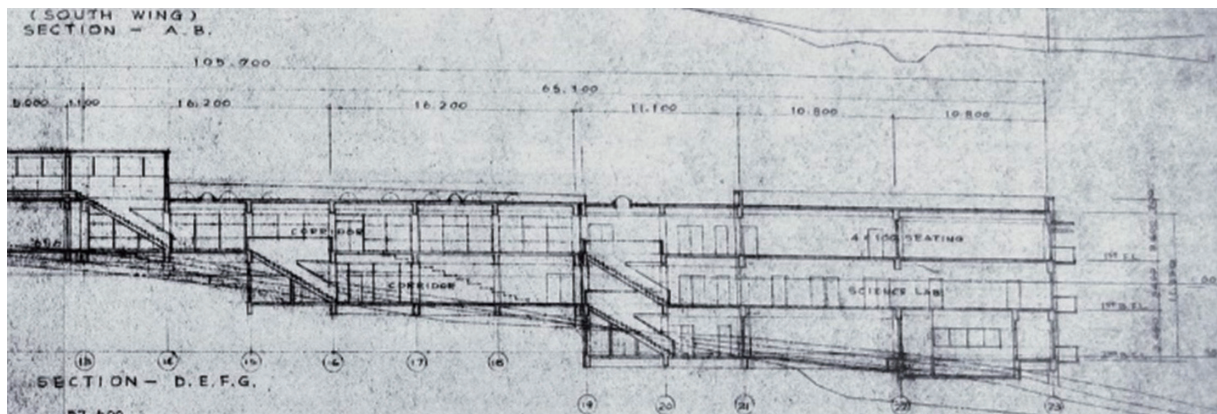
さて私自身は大学卒業後、東京都立大学の大学院に進学したので、このG棟地下を先輩たちがどのように使っていたのか知らない。だが1981年に教員として南山に戻ったあと、図書館3階にあった展示室がG棟地下2階のLL教室跡に移転してきて、やがて民俗学関係の収

集資料が増えてきたために、G棟地下倉庫は部活動に使えなくなってしまったと思う。2000年代のはじめごろ、当時博物館を担当していた重松和男先生の下で増え続ける民俗学関係資料の置き場がとうとう限界に達してしまい、もうひとつG棟地下に倉庫を作ることになった。それはG25教室の床下にあたる空間だった。

そこは壁と鉄製のドアだけはあるが、内部はまったく土むき出しの床下空間のままだった。そこを整備して博物館の収蔵庫にしようとしたのだが、ここで書いておきたいのは整備する前のことだ。この床下が使えるかどうか、当時人類文化学科長だった私は、重松先生と一緒にドアを開錠して中に入ってみたことがある。すると、緩やかな土の斜面の一番奥のあたりに、動物の糞が散らばっていた。このような糞溜めを作るのは間違いなくタヌキの仕業だ。大学の中にときどきタヌキが出るという話は聞いていたが、その動かぬ証拠がそこにあったのだ。どこかの壁の隙間から出入りしていたのになにがいない。

G棟地下はかつて私たち学生にとって居心地のいい隠れ家だったが、きっとタヌキたちにとってもそうだったのである。そういう空間を生み出すのは、計画的な建築家の仕事ではない。それは、そこで生活する生き物たちが勝手に作り出すものだ。「レーモンド・リノベーション・プロジェクト」の進む現在の大学の中にも、そのような隠れ家を許容する余地は残されているだろうか。それはないものねだりかもしれないが、人類学者としては、人間が生活し活動する空間の中にはこのような非公式の隠れ家が自然に生まれてくるもので、それも人間の生の一部なのだ、小さい声でいっておきたい。

(南山大学名誉教授)



「教室棟 全体断面図」 G棟部分（白黒反転）

女子部の桜 旧校舎時代から現在までの変遷

岡 一郎

女子部に植栽されているサクラについて、在職期間中(1979～2020年)の変遷をレポートします。

① 1979年 旧校舎

女子部旧校舎が隼人町に建築されたときに植栽されたソメイヨシノが立派な大木に成長しており、隼人池からの桜並木が連続していてとても美しい風景でした。ソメイヨシノは旧校舎の正門階段を上がった左側に1本、右側に2本、右側斜面に2本、中学出入口に1本、校舎南側(裏側)に2本ありました。中学出入口付近にはオオシマザクラの大木も1本ありました。ヤエベニシダレの大木が高校出入口と正門階段左側にあって、当時名古屋市昭和区の名木に指定されていました。その他、校舎東側・北側・体育館下にサトザクラの品種、中学出入口付近と体育館西角にヤマザクラがありました。

② 1993年 東校舎建築

特別教室棟である現東校舎が旧校舎東の土地に建築された時に、敷地に他の樹種とともに、オオシマザクラ・サトザクラ・ヤエベニシダレが植栽されました。もう1種カスミザクラが1本、東校舎東端の斜面、隣の研修センターとの境界ぎりぎりに生育していますが、東校舎建築前から自生していたのではないかと考えています。

③ 2006年 新校舎建築

新校舎建築に際して旧校舎北側のソメイヨシノ・ヤエベニシダレ・オオシマザクラ・ヤマザクラの大木は老化しており、植え替えもできず、他のメタセコイアなどの高木とともに残念ながら伐採されることになりました。旧校舎時代からのソメイヨシノは、新校舎南側の2本だけとなりました。新しく14種類21本のサクラが、造園業者三樹園の氏家さんのご尽力もあって、他の多種多様な樹種とともに植栽することができました。

④ 新校舎建築後から現在

ソメイヨシノ1種類ではなく、多種類のサクラが植

栽されているため、女子部では長い期間サクラの花が鑑賞できます。シキザクラが開花するのは毎年10月で、少しずつ輪数を増やしていき、真冬に満開になった後も、翌年3月まで花が残っています。早春最初に開花するのがカワヅザクラで、3月1日の高校卒業式の日には見ることができます。次に体育館下のオオカンザクラが咲き始め、3学期の修了式の日には事務室前のコヒガンザクラを眺めながら生徒達は登校します。ソメイヨシノの開花日は毎年気温によって前後しますが、ソメイヨシノに続いてヤエベニシダレが開花するので、毎年サクラの花が新1年生の入学を祝ってくれます。これは旧校舎時代からの伝統です。新学期の授業が始まってからも、ウコン・ヨウコウザクラ・ヤマザクラ・サトザクラと開花が続いて、5月まで鑑賞することができます。

しかし、新校舎建築時に植栽したサクラが、現在すべて生育しているわけではありません。フクザクラとギョイコウは他の高木の陰になって枯れました。二度の台風によって斜面のミヤマザクラとヤマザクラは倒れて、切らざるを得なくなりました。特にミヤマザクラは新校舎建築時にはヒマラヤザクラとして植栽されていましたが、何年も開花せず未確認でした。2013年によく開花を確認できましたがヒマラヤザクラとは異なるので、三樹園さんを通じて東山植物園に同定を依頼してもらった種類です。このサクラが植栽されている場所は少ないので残念です。東校舎に植栽したヤエベニシダレはその後大きく成長して、毎年たくさんの花を咲かせていましたが、近年菌類に寄生されて枯れてしまいました。事務室前のコヒガンザクラは第2のシンボルツリーでしたが、毎年モンクロシャチホコの猛攻に遭って弱っていた所に、根もやられてついに2019年に枯れてしまいました。しかし、G67の卒業記念品によって新しく植え替えられて、2020年3月も開花を見ることができました。

生育場所	種名	栽培品種名等	漢字名	1979年	東校舎	1993年	新校舎	2006年	2020年
				旧校舎	建築植栽	旧校舎	建築植栽	新校舎	現在
東校舎	カスミザクラ	野生種	霞桜		1	1		1	1
	サトザクラ	シヨウゲツ?	松月		1	1		1	1
	オオシマザクラ	野生種	大島桜		1	1		1	1
	エドヒガン	ヤエベニシダレ	八重紅枝垂		1	1		1	
本校舎南側	ソメイヨシノ	種間雑種	染井吉野	2		2		2	1
本校舎東側	サトザクラ	フゲンゾウ	普賢象	1		1		1	1
本校舎北側 北東斜面	オオシマザクラ	野生種	大島桜				1	1	1
	ミヤマザクラ	野生種	深山桜				1		1
	シキザクラ	種間雑種	四季桜				1	1	1
	カワヅザクラ	種間雑種	河津桜				1	1	1
	ヤマザクラ	野生種	山桜				1	1	
	サトザクラ	フクザクラ	福桜				2	2	
	サトザクラ	ギョイコウ	御衣黄				1	1	
	サトザクラ	シヨウゲツ?	松月	1		1		3	3
サトザクラ	フゲンゾウ	普賢象	1		1		1	1	
本校舎北側 正門東側	サトザクラ	ウコン	鬱金				1	1	1
	ヨウコウザクラ	種間雑種	陽光桜				1	1	1
	ヤマザクラ	野生種	山桜				1	1	1
	ソメイヨシノ	種間雑種	染井吉野	1		1	3	3	4
	シナミザクラ	ダンチオウトウ	暖地桜桃				1	1	
	エドヒガン	ヤエベニシダレ	八重紅枝垂	2		2	1	1	1
本校舎北側 正門西側	エドヒガン	ヤエベニシダレ	八重紅枝垂				1	1	1
	ソメイヨシノ	種間雑種	染井吉野	5		5	1	1	1
	オオシマザクラ	野生種	大島桜	1		1			
	ヤマザクラ	野生種	山桜	1		1			
	シナミザクラ	ダンチオウトウ	暖地桜桃				1	1	1
	オオカンザクラ	種間雑種	大寒桜				1	1	1
第1体育館下	サトザクラ	フゲンゾウ	普賢象	1		1		1	1
本校舎西側	ヤマザクラ	種間雑種?	山桜	1		1		1	1
本校舎事務室前	コヒガンザクラ	種間雑種	小彼岸桜				1	1	1

合計 17 4 21 21 33 28

表 女子部のサクラの変遷 (旧校舎時代のサトザクラの品種は推定 参考文献: 日本の桜 GAKKEN 2007)



旧校舎北側 2004. 4. 3



旧校舎から隼人池 2002. 3. 31



2004. 4. 3



旧校舎のヤエベニシダレ 2003. 4. 7



体育館北 旧校舎からのサトザクラ



体育館西 旧校舎からのヤマザクラ



東校舎 ヤエベニシダレ



東校舎 オオシマザクラ



東校舎 カスミザクラ



新校舎南側 旧校舎からのソメイヨシノ



新校舎北側 シキザクラ (2017. 12. 2)



新校舎北側 カワヅザクラ



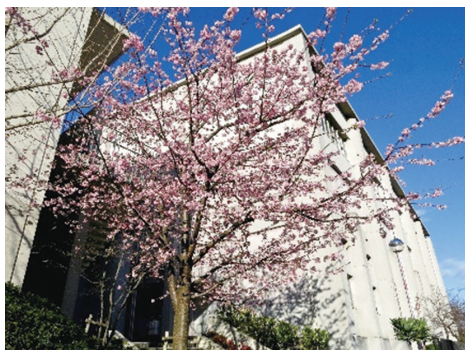
新校舎北側 ミヤマザクラ



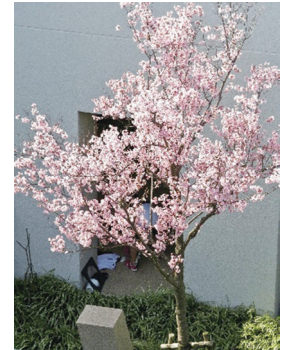
新校舎北側 サトザクラ ウコン



新校舎北側正門西 ヤエベニシダレ



新校舎北側 体育館下 オオカンザクラ



新校舎事務室前 コヒガンザクラ

(南山高等学校・中学校女子部 名誉教諭)

中村哲先生 ご来校

熊川 重也

かつて、先生の招待講演を実現した男子部の生徒たちがいた。19年末、中村先生の訃報に接して、いまは社会人となった彼らは驚き、そして心に深い哀しみを覚えた。

話しはさかのぼって、2000年。生徒たちは、宗教の授業で番組「21世紀の君たちへ」のなかの一部分を観た。それは医師中村哲先生が難民のために医療活動をしているようすを番組にしたものだった。

講演前、静かに自分の体験を話す中村さん



そのなかに貧困にあえぐ少年スレイマン（当時13歳）が登場していた。16分程度の番組だったが、どのクラスの生徒も観たあと静まりかえってしまった。教材としては第一級で、たいへん胸を打った。「おなじ歳くらいの子のことだ。みんなはどうする？」と生徒たちに問いかけた。番組を観たあと、すぐに生徒から溢れるように意見は出ない。まず「自分はこうしたい」と思ったことを紙に書いてもらった。その後、用紙を回収。「来週の授業で生徒たちで話しあうのも無駄じゃない」と話しかけて一回目の授業を終了。そこで、一学年約200名が書いてくれた生徒の意見に目を通してみた。生徒の意見はだいたい下記の6種類に大別できた。この時点で筆者は腹を決めていた。というのも生徒全員に意見を求めると、本当に思わぬ考えや意見が飛び出してくるもの。とにかく、最後まで面倒みるという心意気がないといけない。「先生は意見や考えを聴いたり、紙に書かせたりするけど、簡単に授業をまとめるだけ。最後に教訓じみた内容でまとめて、『ハイ、これで終わり』つまらない」

という雰囲気を植えつけてしまう。そこで次のようにした。生徒たちの意見の6種と、それぞれに付随する種々の意見を印刷して、つぎの授業に臨んだ。クラスの議員が司会者になり、クラスのみんで①～⑥について意見を出し合って批評した。

- ①とにかく物が足りない。清潔なタオル、薬等を送る。
 - ・ものは集まるけど、けっこう送料がかかると思う。
 - ・お金を送って、それでタオルや薬を買ってもらおう。
- ②番組だけではようすが分からない。ぼくたちの代表が現地に行ったあと報告する。問題は旅費。
- ③自分たちで募金する。お金は中村哲先生に渡して有効に使ってもらおう。
 - ・自分たちですぐにできることは募金だと思う。
 - ・事情を知っている中村先生に手渡して、いちばんいい方法で使ってもらおう。
- ④日本の国がもっと援助してやったほうがよい。総理大臣か係の大臣に手紙を出す。
 - ・国からお金が出るかどうか？でも、ぼくたちは手紙を書いてお願いはできる。できることをやろうよ。
- ⑤中村哲先生に南山まで来ていただく。そして事情をくわしく聴いてみる。
 - ・そうだ！現地の事情をいちばんよく知っているのは中村先生だ。学校に来てもらって、お話をしてもらおう。いろいろ勉強できる。でも旅費がいるなあ。
- ⑥「この番組の再放映をやって！」とそのテレビ局に手紙を出す。日本で関心が高まると思う。
 - ・これは、1年生でもできること。すぐやろうよ。

④の意見。それにまつわるエピソード

「僕たちも募金するけど、国にも出してもらおうよ。総理大臣に手紙を書いて出す」というものだった。総理に手紙を書くというワクワク感からくるのか、これは結

構、人気のある考えだった。当時の首相は小渕さんだった。意外かも知れないが、小渕首相は生徒たちに人気があった。まさか「小渕総理の政策が素晴らしい」とか、そういった理由からの人気とも思えない。それで生徒たちに聞いてみると「いまの総理大臣、親戚のおじさんみたいでいい」とか、そんなノリだった。

ところが、この仕事を進めている間に小渕首相が急死してしまった。生徒たちは、驚きショックを受けた。

一方、愛知県から学校に「国の子ども国会参加希望募集の件」という公文書が届いた。国（文部科学省）が主催だった。そのとき、難民に関心を持ち、また皆で支援しようという内容が審査をパスし幸運なことに選ばれた。子ども国会のとき、東京で「難民支援の要望書」を文部科学省の人を通して、当時の総理に渡すことができた。

⑤のグループ。番組の担当者と連絡がついた。「中村先生の支援団体が九州福岡にある。連絡先を教えるので、そこに手紙を出すよ」ということだった。まず、筆者が電話をいれ招待講演の趣旨を説明。このあと、学校側の公文書とともに生徒が手紙を差し上げる旨を伝えた。すると「4月下旬に一時帰国するので、先生に伝える」ということだった。先生が帰国する直前だったか、「若者によるバスジャック事件」が起きた。中村先生は「日本は、いったいどうなっているんだ」と話した。そのおりに中学生から招待講演の話だったので、中村先生はすぐに即決されたとのことだった。講演は、地元のテレビ局、中日、朝日の各新聞にも取り上げられた。



入場の際、生徒から握手攻めにあう

当日の中村先生の講演は、先生の人柄もあって生徒たちが驚くほど親しみやすいものだった。生徒のエスコートで学園講堂に入場されるとき、握手を求めて生徒たちが差し出した手をひとりひとり、はにかみながら握手し

てくださった。（そのときの生徒が大人になったいま、先生の訃報に接し、また生前の功績が改めて日本の社会に報道されたとき、その卒業生は職場で先生の話をし、また家庭では自分の子に『お父さんは中学生のときに、みんなで先生をお呼びして、講演してもらった。握手もしたヨ』と話したに違いない）



男子部の中学2年生に現地の事情を話す中村さん

『日本の子どもたちは、どう生きるべきか』の題で、「お金や高い地位を手に入れることは悪いことではないが、それらに惑わされないで生きて行ってほしい。私は難民医療奉仕の仕事で、人は助け合って生きることを学んだ」と中村哲先生は、南山の生徒に自分の体験を率直に話した。【2000年5月16日学園講堂で】

先生のこのことばは、南山ご来校者殿堂入りベスト10（このフレーズは生徒たちの発案）が他のご来校者の写真とともに大きなパネルに納められ、いまも男子部の図書館に掲げられている。

パキスタンにいる中村先生を招待したいといい出したメンバーは、当時中学1年生だった。氏の講演前後、おおぜいのメディアの方の取材に驚いて「ぼくたちはたいしたことはしていない。講演実現は運が良かったから」といった。しかし、中学生という多感な時期に直接先生と会い、話を聴き、その生きかたを学べたことは「たいしたことだった」に違いない。

中村先生が南山で生徒に話したのは、2001年NY9.11テロに端を発したアフガン空爆、日本国会での参考人招致等で先生が広く世間の注目をあびるまえのことである。今はご冥福と遺志が活かされることを祈りたい。

（南山高等学校・中学校男子部宗教科元教諭 有志の会顧問）

旧南山小学校の児童文集より

西脇 良

南山アーカイブズに所蔵されている旧南山小学校関連資料のうち、児童文集は、管見の限り合計 14 冊である。(文集の一部と考えられるプリント断片も残されているが詳細は不明である。)書き下ろしの作文や自由詩の他、児童の日記の転載、児童による挿絵などを内容としている。その大半 12 冊は、第 1 期生柴山里子氏による寄贈であり、氏の 1 年生から 4 年生の時期に編集されたものである(発行時期としては 1936 年 9 月～1939 年 12 月)。残る 2 冊については柴山氏の名前はなく発行年月の記載もない。児童名から 3 期生のものと思われるが、時期推定作業は今後委ねられる。



文集『ナツノニッキ』表紙(1936年)

所蔵 14 冊のうち最古のものは『ナツノニッキ』(1936 年 9 月 10 日発行、児童 10 名の作文 [以下〇名と表記])である。次いで『文集』(11 月、12 名)、『ニッキ』(翌年 1 月、12 名)と続く。1 期生は創立時 11 名でスタートするが、各文集に掲載されていなかったり転入後に掲載されたりするケースがみられ、3 学期時点では 12 名の掲載となっている。

1 期生が 2 年次となった 1937 年度は、『じいうにつき』(9 月頃、28 名)、『童詩 みなみ山の子供』(発行時期不明、13 名)、『文集 みなみ山』(発行時期不明、14 名)、『自由詩』(発行時期不明、13 名)の 4 冊が知られる。このうち『じいうにつき』には 28 名の作文が掲載されているが、内 16 名は 2 期生(1 年次)のものと思われる。転入転出もあり、1 期生の学年末の在籍者は 15 名であったと推測される。

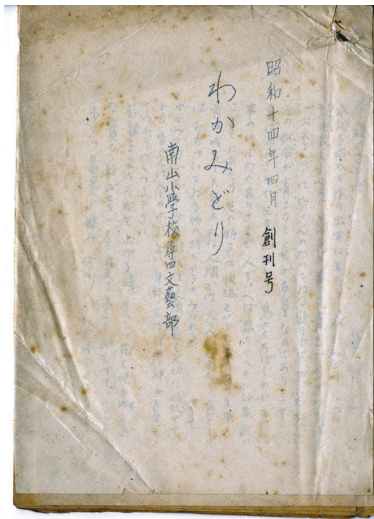
1 期生 3 年次である 1938 年度のものは 1 冊のみ、『作文集』(2 学期中、19 名)が所蔵されている。関連資料(手書きメモ)によれば、1 期生が 1 年次から 3 年次 2 学期まで担任であった鈴木義雄教諭が転任し、3 学期から笹野正雄教諭に引き継がれた。この『作文集』は鈴木教諭編集による最後の文集となった。

4 年次となった 1939 年度より、笹野正雄教諭編集の文集『わかみどり』が発行されることになる。『わかみどり創刊号』(4 月、19 名)、『わかみどり第 2 号』(4 月 29 日、18 名)、『わかみどり第 3 号』(5 月、19 名)と続く。ちなみに現在の南山大学附属小学校保護者会は、名称をこの文集タイトル「わかみどり」からとり、会報誌の名称ともしている。所蔵は 3 号までで、4 号以降が存在するのかわからない。その後、12 月に『どんぐり第 1 号』(12 月、18 名)が発行されるが、こちらは平岩久信教諭による編集である。担任が交代となったのか不明である。

その他、上述のようにおそらく 3 期生の文集と推測される『文集 ユリカゴ 1』(発行時期不明、17 名)、『文集 南山 二年』(発行時期不明、15 名)、さらにプリント断片数枚がある。

余談ながらアーカイブズ所蔵資料の中には、その他、児童劇台本(『鉄道開通』『おくりもの』)、歌集(『子供

の歌』)、夏休み課題 (『ナツノオシゴト』)、等が含まれている。



文集『わかみどり』創刊号 表紙 (1939年)

さて、これらの文集に書かれた内容についてであるが、取捨選択や編集の手が加えられたであろうことを前提としつつも、エピソードの時系列や言及された人名などを詳細に整理分析していくことで、かなりのことが分かりそうである。U. ブロンフェンブレンナーの生態学的モデルにならない、児童の家族および家庭の状況、児童同士の交友関係、児童の経験 (遊び、旅行等)、保護者と学校との関係、地域社会との繋がり、児童の捉えた時代情勢 (日中戦争) 等の視点で整理してみるのも一つであろう。分析は今後の課題として、これまであまり紹介されていないもので、校内での出来事を中心に幾つか紹介してみよう (読み易さを考慮して原文の字体等は変えてある)。

「し (筆者注: 詩) を 半分かきで / 水のみに 行ったら / K君の口が ふくれていたから / おさえたら / ぼくの顔に / 水が かかっちゃった (W.)」 (『文集 みなみ山』)

授業中であろうか、水飲み場での子どもらしい楽しいエピソードである。次は、小学校にピアノが到着した時の興奮した雰囲気が続けられた2本である。

「ピアノ / ぼくが / ベンじょに いこうと思って いったら / ピアノがきたよ / ぼくは うれしくて / たすけて

くれい と いった にかいにいった / Iくん / ピアノが おしよせた と いった / みんなが いったら / まだ まだと いった / Tくん / ピアノのおなかとてると いったよ / みんなが いったら / ほんとだった。 / みんなが / ほんとだ ほんとだと いった (S.)」 (『自由詩 南山小学校』)

「ピアノ / 今日 ピアノ が 来たよ / ピアノのおなかに 棒が ついてた / ピアノ もって来た人が / ピアノのお腹 見ながら / ピアノ ならしてた (S.)」 (『自由詩 南山小学校』)

両者は別児童であるが、前者に登場する「Tくん」(下の名前)は後者の作者であり、或る児童の表現「ピアノのおなか」が、それを聞いた別児童の文中に再生されている事例である。この出来事を「ピアノ到着事件」と呼ぶなら、次の出来事は「リス逃亡事件」であろう。

「にひきのりす / りすにお水をやろう とおもって あけるひょうしに にひきのりすが にげてしまいました。一年生のはみんな ぼうしや ほうきをもって来ました。そうして さわいでいるうちに かねがなりました。すると三年生も 二年生も みんなぼうしをもって はしりまわりました。やっと一びきだけ つかまりました。でもそのりすは しっぽ から ちをながしていました。だから 先生が りす におくすりをつけて やりました。(A.)」 (『文集 ユリカゴ 1』)

「りす / りすが また きのうにげたよ。だれかが おうちをひっくりかえしたから。それからみんなが 大きわぎしたよ。そしたら 先生 が りすは 『そおっとしておいたほうがいい。』といたから、みんなは そおっ としておいたよ。そしたら つかまったよ。小さいはこの所で、つかまったよ。(S.)」 (『文集 ユリカゴ 1』)

屋内か屋外か、場所は定かではないが、逃げ回るリスを1年生から3年生までが一緒になって追いかけて回す様子が綴られている。何とも温かな印象を残すエピソードである。次の作文は、南山小学校に転校して来た或る児童が、クラスの中で友人関係を結んでいく様子をうか

がわせる内容である。

「でか大将／でか大将というのは、今度新しく転校して来たI君のことです。I君はとてもこっけいな、とてもほがらかです。でか大将とあだながついたのは、ずっと前の唱歌の時間の時のことです。I君（筆者注：別児童）がI君に『君はでかだ。』と言ったのでI君はちょっと考えていたが、いきなり、とんきょうな声を出して『でか大将。』と言ってひげをひねるまねをしたので、皆大笑をしました。これがあだなの始まりです。土曜日の日でした。I君（筆者注：前出の児童）たちが飛行機を紙でつくって飛ばして遊んでいました。そのうちI君も来ました。そして良い飛行機を作るとばしたらとてもよく飛んだのでI君大喜び。さっそくでか機と名前をつけて、『でか機よりよく飛ぶ飛行機はない。』と言っていばっていました。（K.）」（『わかみどり創刊号』）

授業中の様子が綴られたものも見受けられる。次の作文は、高山孫三郎校長による理科の授業の様子である。

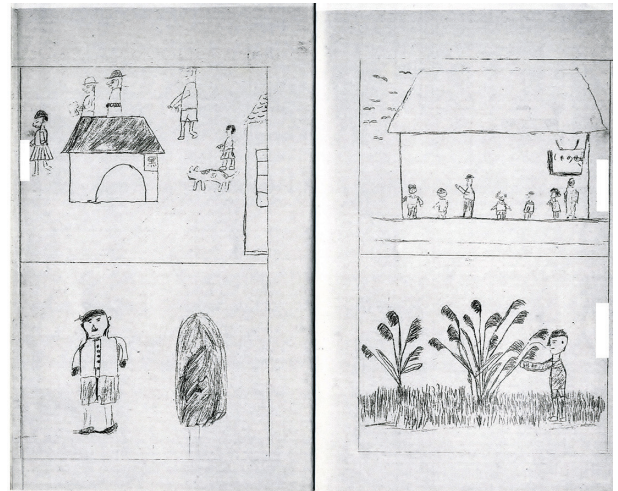
「あぶらな／午後理科がありました。高山校長先生がいらっしゃって、なのはなをしらべた。まず花びらを数えると四枚、がくも四枚ありました。おしべは長いや短いがあるので、僕はどちらがおしべだかーしょうけんめいに考えたけれど、どちらもおしべのようなので合わせて『六本。』と言いました。すると校長先生が、『短いのが何本あるか。』とおっしゃったので、みんなおしべだったのかと気がつきました。終いに校長先生が四枚ずつにくみ合っている花びらは、十字科（筆者注：原文ママ）だと言うことも教えて下さいました。先生が『今度花を取りに行く時まちがって持って来たものはげんこつ。先生のげんこつはいたいぞ。言った通りの花を持って来たならなぜなぜしてあげる。』とおっしゃったが、先生のげんこつは、そう痛くはないと僕は思います。（M.）」（『わかみどり創刊号』）

次の文章は、児童が夕刻にパッへ師の住む宿舎（ピオ11世館、当時は木造3階建）におつかいに出たエピソードである。

「おつかい／あのね このあいだ ばん ちょっと くらくなってから パッへせんせいのうちへ 南山小がっこうと かいた かみ もってったよ／そうしたら もって行って でてきて ありがとうと いったよ／それで うちへ かえって おとうちゃんに ほめられて ごはんたべたよ／それで おとうちゃんが T こわく なかったかと いったから ぼく こわく なかったよと いったよ (T.）」（プリント断片）

小学校保護者がパッへ師に渡そうとした急ぎの書類であったのであろう。「こわくなかった」のは薄暗い夕刻の風景のことだったのか、それともパッへ師のことであったのだろうか。

以上、ここまで、当時の南山小学校の校内でのエピソードを中心に紹介してきた。今後は、これらの文集の内容を詳細に分析することで、南山小学校に在学した当時の子どもたちの姿を、児童生活の観点から浮き彫りにすることを課題としたい。



文集『文集 南山 二年』（時期不明）の児童画

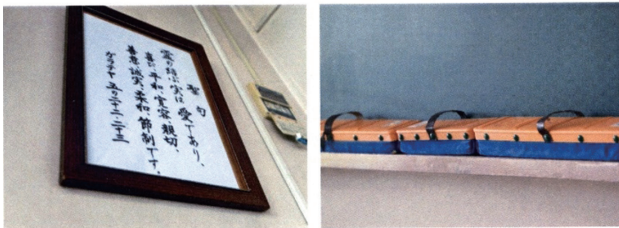
最後に、『わかみどり第3号』より、当時4年生担任・笹野正雄教諭の「考え物」（なぞなぞ）を3題。読者はお分かりになるだろうか…。

「考え物／1. 使えばつかうほどふえるものはなんでしょう。／2. 万年も生きていないくせに万年生きているといばっているものは何でしょう。／3. いる時にいらないうちにいるものはなんでしょうか。」（『わかみどり第3号』）

（南山大学附属小学校校長）

学び舎の記憶「聖霊アーカイブ」活動

鈴木 稔子



1970年4月、愛知県瀬戸市山口北山（当時）の地で名古屋聖霊学園は新たな始まりを迎えた。移転当時、聖霊学園理事長の職にあったシスター・トマ・アンナ・テレンは、瀬戸移転について次のように記している。

「三の丸時代は第1創設期であり、今年から始まりましたこの瀬戸の地での出発は、第2創設期であるとして、よりよい成長を遂げたいと意欲にもえております。（略）本学園のねらいは内容の充実、聖霊の精神性の充実と向上にあります。この目的達成に向かって真剣に努力して参りたいと思っております。」（1979年10月名古屋聖霊学園竣工記念冊子より）」

50年が経過し、聖霊中学高等学校は2020年4月に南山大学旧瀬戸キャンパス跡地を利用した新校舎へと移転することとなった。この移転については2018年度から実質的な建築計画がすすめられ、教員間では新校舎を活用した多様な教育実践の可能性について活発な議論が始まっていた。のちに生徒にも現校舎の移転と取り壊しに関わる計画が示されたものの、生徒達にとってはまさに青天の霹靂、自分達が現校舎との別れをどのように迎

えるのかについては、意識にのぼらなかったようである。しかしながら、程なく生徒達は動きだした。

本校には全学年にリーダー会議という組織が存在する。これは各クラスの学級委員で構成されており、半年の任期中に学年の自主自治活動のイニシアティブをとる立場にある。当時高校2年生のリーダー会議において、校舎移転にあたって生徒が積極的に関わることはないのか話し合われた。その場で「聖霊アーカイブ」という企画立ち上げの提案があった。提案した生徒は「聖霊アーカイブ」の概要を次のように説明している。

「私たち高校2年生の卒業を最後に、現在使用している校舎から南山大学の校舎に移転することが決まり、ある意味で“最後の卒業生”である私たち高校2年生が主体となり、全校生徒をまきこみ、形にのこるものとしてこの校舎があった証しを後輩たちに様々な形で伝えていきたいという企画です。」（2018年6月リーダー会議資料より）」



移転まで2年間という時間をかけて校舎に対する思いを具現化しようとする試みを教員も了承した。こうして2018年6月に「聖霊アーカイブ」企画の取り組みが始まった。当初は現校舎の模型製作、グラウンドで全校生徒の航空写真撮影、校舎お別れ会開催の3つが原案として示された。ところが、リーダー会議の議論の過程で「聖霊アーカイブ」を支える財源がないことが問題となり、9月の文化祭でこの取り組みについて自分達の聖

霊に対する熱い想いをアピールしながら募金活動を展開することを決定した。2日間の募金活動で総額9万2957円の協力を得ることができた。



9万円を超える予算を手にして、いよいよリーダー会議はこの企画をやり遂げねばならないという責任を実感したようである。10月には校舎の模型製作費用と航空写真撮影に必要な金額を調査し、予算案を立てて企画決定へと動きだした。しかし現実には厳しく、どちらの企画もはるかに予算を超える費用がかかるとわかり、アーカイブ企画は一旦動きを止めた。リーダー会議の議論がやや下火になった頃、後期のリーダー改選があり、前期に検討した内容を後期リーダーが引き継ぐことになった。

後期リーダーが企画の行き詰まりを感じはじめた頃、リーダー会議担当教員が南山アーカイブズ訪問を提案した。この訪問はアーカイブズについて学ぶきっかけとなり、停滞していた「聖霊アーカイブ」企画は具体的に動き出したのである。それは2つの流れを持つことになった。ひとつは、校舎模型や航空写真のような全体像を残すもの。もうひとつは、聖霊生の学び舎への思いを残せるようなもの。後者について2018年度後期リーダーが2学期末に高2生徒全員に向けて次のメッセージを伝えている。

「アーカイブ活動で、校舎とその周辺の写真を残すという企画があります。その写真を高2のみんなに撮ってもらいたいです。今しか残せない！私たち生徒から見た校舎の写真を残しましょう。(2019年1月高2リーダー通信より)」

2019年2月某日、高2生徒全員がカメラを手に聖霊

のキャンパスで写真撮影会を行った。小グループで行動すること、移動や撮影時のマナーを守ること、人物が特定されるような写真は避けることなどをリーダーから呼びかけた。撮影した写真データは撮影生徒の承諾をとり、リーダー会議のアーカイブ担当者2名が管理することになった。写真撮影にあわせて「教えて！あなたのエピソード」という用紙が高2生徒に配付された。聖霊のキャンパスで最も思い出に残っている場所について、そこにまつわるエピソードを書いてもらうというものだ。撮影した写真とエピソードをまとめた写真集作成の方針を固めて、生徒は3年に進級した。

「私たちはアーカイブ企画を来年度も続けていきたいと考えています。今いる校舎を次の校舎に移っても何らかの形で残しておく方法はまだまだ沢山あると思っているからです。ですが、それを実現させるにはみなさんの協力が必要不可欠です。」(2019年2月高2リーダー通信より)

2019年4月、高校3年前期第3回リーダー会議でアーカイブ担当者から具体的な提案がなされた。予算の都合で校舎の模型製作と航空写真撮影を断念した結果、新たな提案は現校舎の雰囲気を変えられるようなステンドグラスの制作であった。1年以上話し合いを重ねて、ようやく「メイン」となる企画がステンドグラス制作へと形をとり始めた。

「皆さまからいただいた思いをどのような形として残せばよいのか、またどんな形で残せば多くの人たちに末永く愛されるものになるのかを検討し、その結果、ステンドグラスに私たちの聖霊への愛とありがとうの気持ちをこめることにしました。」(聖霊中学校・高等学校 時報150号より)





2019年4月、高3第2回リーダー会議でアーカイブ担当生徒は活動の意義と前年度からの経過を報告し、卒業までを視野に入れてやり遂げる責任をリーダー会議に求めた。翌週の会議ではステンドグラス制作の原案が示された。リーダー会議は各クラスからの報告を受けて討議し、5月下旬の会議でステンドグラス制作を決定した。高3生として、そろそろ進路決定に向けて本格的に動き出す時期ではあったものの、アーカイブ担当生徒はステンドグラス制作に向けて夏休み中も熱意をもって取り組んだ。こうして卒業を間近にした2020年2月、縦

65センチ、横65センチのステンドグラスと、66回生の思いをこめた写真冊子が完成した。

「聖霊には70年もの歴史があり、数え切れないほどの先輩方が卒業しています。きっと私たちの知らない聖霊の歴史が、この校舎にはたくさん詰まっています。たとえ校舎が新しくなったとしても、後輩達には今までの歴史や数々の思い出を忘れることなく継承し続けてほしいと思います。」(聖霊中学校・高等学校 時報150号より)

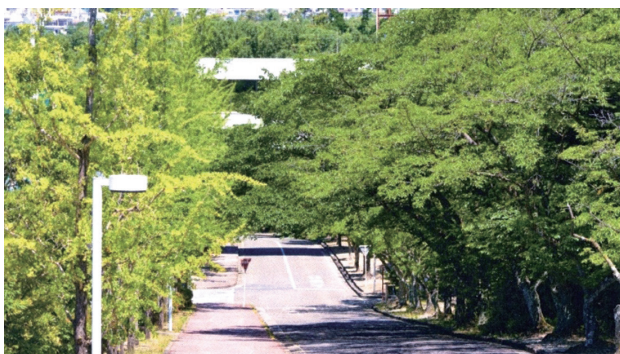
“消えゆくものの記録”と、それにまつわる一人ひとりの“記憶”を後輩たちにのこして66回生は2020年3月2日、聖霊高校を巣立った。



記念のステンドグラス

※上記、記念のステンドグラス以外の画像は全て『「聖霊アーカイブ」2019年度卒業生(第66期生)』による

(聖霊高等学校・中学校教諭)



南山アーカイブズニュース 第13号
Nanzan Archives News

発行日 2020年11月1日
編集・発行 南山アーカイブズ
名古屋市昭和区五軒家町6番地
印刷 常川印刷株式会社
名古屋市中区千代田二丁目18番17号